

皆さんこんにちは。まず初めに、はるか南の九州から皆さま方にお話する機会を与えていただきました、浅川先生初め造園学会北海道造園支部の方々にお礼を申し上げたいと思います。

私自身としては、造園という職業にかかわっておられる方にどれ位お役に立てるか分かりませんが、つぎの点をはっきりとお伝えできると思います。まず一つ目は、「園芸福祉と園芸療法というのとは一体どういうものなのか」。二つ目は「何故そういう活用の仕方が可能なのか、その基本となっている背景、あるいは理由というのとは何だろうか」ということ。この二点をご理解いただければ、造園を進めていく上、あるいは植物とのかかわりを考えていく上でも、「緑と安らぎのランドスケープデザイン」のコンセプトあるいは理念のひとつとしてお使い頂けるのではないかと考えております。

今日お話いたします概要としましては、まず最初に、「園芸とは何か」、次に「その園芸がもたらす効用とはあるいは恩恵とは何なのか」、「その効用を活用してどのように私達の暮らしを豊かにしていくか、あるいは人間らしくしていくか」ということですね。

日本に園芸療法が導入されてから10年くらいになります。この間に、概念的にも実際の動きでも非常に大きな成果がございました。このことを私は一言に「園芸療法から園芸福祉へ」という風に申しておりますけれども、これは一体どういう動きだったのかと。

最後に、園芸療法にしても園芸福祉にしても、要するに基本的には「園芸のもたらす効用を活用してより人間らしい生活をする、人間の幸福に貢献していく」という考え方なのですが、どうすればそのような形で利用できるのか、あるいは応用できるのか、その裏にある基本的なとらえ方、そういうところをちょっとお話ししようかと思っております。

園芸とは何か

最初に、私達と植物とのかかわり方、これには実はすごく様々な場面がございます。皆さんの周囲を見渡していただきましたら、もうとにかく行く先々に植物があるでしょうし、あるいは部屋にあるでしょうし、あるいは時には自分で植物の手入れをしておるでしょうし、いろいろなところにあるんですね。もっと言いますと、例えばことわざですとか、あるいは色のなかですとか、あるいは紋章ですとか、ほかにも例えば初心者マークみたいなシンボルの形として利用されている場合もあるわけですね。

そのようなかかわりの中で、園芸というところでいちばん特徴的なところはどこかということ、「人間と植物とのかかわりのなかで、植物の育成にかかわりながら植物の手入れあるいは世話をする」というところですね。要するにここが園芸あるいは園芸活動の基本なわけですね。こここのところに園芸という部分が出てきます。最近の言葉では俗にガーデニングという風に言われますけれどもね。

実際はどのようになっているかと申しますと、例えば、ある植物を植えよう、とかなんか考えます。そこで実際種まきをしたり苗を植えたりします。そして芽が出る、あるいは苗がつく、それを五感で味わう。そしてそれに必要な処置を加える、水をやったり肥料をやったりするということをやる。そうするとますます植物がそれに応えて大きくなっていく。すると途中で虫が出ることもあるし、病気になることもあります。

そういうものを退治するなどをして、やっとなんか咲く、あるいは食べられるようになる。このように、植物の成長に合わせて実際にいろいろと手を下したり、あるいは五感で味わったりフィードバックしながら進行している過程、これが園芸の基本的な部分ですね。しかしながら場合によっては、その延長上に、いろいろな細工、植物工芸的なことをやったり、あるいは料理をしたり、あるいは食べたりなどもあるわけです。

この進行過程は、基本的には自分がするものですね。これに加えてほかのものを使っていろいろやる。このところも一応園芸の一環としてとらえることができるんです。

実際に自分が体を動かすのを「動作体験」。それから五感で味わう、五感でかかわる。これを「感覚体験」と言っておりますが、この感覚体験と動作体験のフィードバックプロセスは大切です。そうですね、例えば料理をすとか生け花をすとか、あるいはポプリを作るなどあります。こういった自分で作業して、育てて、それを使うという場合には、園芸の一環、プロセスの中に含んで考えることができると思います。

しかし店で買ってきたりするような場合、これは決して園芸とはいいいませんね。買ったりもらったりという様なことは決して園芸という風に考えるわけにはいかない私は考えております。

園芸がもたらす効用と恩恵とは何なのか

植物に対してこのように体験する。結局行動自体と、行動からできた生産物と、その両方にかかわっていくことになるわけですけども、そういうことが一体どのような効用と申しますか恩恵といったものを私達にもたらしているのかというのを簡単にざっと紹介してみます。これについてはいろいろ考え方がございまして、例えば身体的な効用だとか、あるいは心理的な効用、社会的な効用というような形で3つぐらいに分けたものもあります。だけど実際は、お互いが絡みあっているものですから非常に分かりにくくなっています。

そういう点から、ここでは一応8つに分けて考えてみました。生産的効用、経済的効用、環境的効用、心理生理的効用、社会的効用、教育的効用、身体的効用、そして人間的効用です。これについてちょっと簡単に、スライドでお目につけてみたいと思います。具体的には、いくつかの例は今日お配りしました資料にある程度説明しております。実際はもっといろいろあるのですが簡単にいたしました。さらにそれをもっと簡単に紹介していきたいと思っております。

(生産的効用) やっぱり種を播いて、大きくなって食べられるようになる、これが非常に大きな喜びですね。実際に物ができるといことはひとつの大きな効用です。花ができるとか、薬用植物、ハーブができるというようなことがありますけども、造園学的な面からみると景観ができることもひとつの生産物ですね。自分たちで作ったものというのとはたとえ見かけは悪くてもそれなりに味わいのあるものです。私が作った物だというひとつの大きな喜びが、(スライドをみて)この顔に表現されているわけですね。

(経済的効用) 今度は、農家が主にやってきたことなんですけれど、生産物をお金に換えて評価する、いわゆる経済的に評価するという側面もありますね。余ったものを農家が売っている形で、無人販売のところちょっと小遣い銭を稼ぐというのいろいろあるでしょう。これもひとつの喜びですが、アマチュアの場合にもこれができることによって、例えば生産物を買わなくてすむといったこともひとつの経済的な効果ということになります。

(環境的効用) それから環境的な意味で、これはある施設の例ですけれども、庭が殺風景だった。そこにこういう風に植物を植えることによって、施設の人たちもよくここに出て行くようになったそうです。このように、環境が少しこう、何となく魅力のあるものになったということがありますね。こういうところに住みたいという人はなかなかないと思いますが。庭を持つとか、緑のたくさんあるような環境というのは、やはり安らぎ、あるいは癒しといったものを与えてくれるということで、環境的な面で非常に大きな価値もっています。

もちろんこれには、環境条件を整えたり、心理的に安らぐような、あるいは癒すような景観をつくるという側面もあるわけです。

(心理生理的効用) これは実は、(スライドをみて)応接間です。ある会社の応接間なんですけど、向こう側が南側になっておりまして、陽が入ります。そこにいろいろな植物を置いてあるわけですが、ここに通されたお客さんは、まずギョッとするといったことを言います。この植物を話題にいろいろ話が弾むとか、それから、なにかこう顔がほころんでくるとか、まあいろいろ心理的ないろんな影響をもたらしてくれるそうです。

このような景観もそうですよね。ひとつは例えばプライバシーを守るという意味で、昔はこういった生垣というものは大きな役割を果たしていました。けれども最近ではどうも、こういうことをやっているとか泥棒にフルに活用されるよと、注意されることもある。で、できるだけ透かすような生垣をつくる。あるいは生垣を作らないというようなことが推奨されているようです。

(社会的効用) つぎが社会的な効用です。これは、人と人とを結びつける役割を園芸が果たすことです。これは東京都の区民農園の例ですけれども、この2人はどこにも不自由はございません。たまたまこの農園を借りて耕作をやっている人ですね。一休みしているところ、たまたま一緒になって、ここで話が弾む。場合によっては、できた生産物の交換をやる。「うちに沢山できたのでもって行って下さい」、「じゃあ私のあげま

しょう」と、キュウリとナスとを交換するですとか、あるいは時にはですね、うちの人たちの悪口を言うようなこともあるみたいですね。まあいずれにしてもそういった機会あるいは場を提供するという社会的役割を果たしております。

これもその場のひとつですね。ある福祉施設で一緒に作業やっている風景ですけれども、このように会っているとお互いが話をしやすくなる。これもひとつの社会的な効用のひとつです。

それから、これは多分、心理的な影響を及ぼす意味での一つの事例としてあげたんですけども、東京の神田のど真ん中です。狭い道の脇に店がいっぱい並んでいまして、いかにもこうなんか押しつぶされるような感じになるところなんですけど、こういう風なちょっと植物を入れてやることによって、非常にほっとするような、あるいはなにか広くなるような感じがすると、そういう風な効果を持っております。

(教育的効用) これで取り上げようとしているのは、教育的な意味での効用です。こういった様々な行事のなかで、様々な園芸植物が使われております。その園芸植物には、実はたくさんの意味がこめられているわけですね。要するに象徴化して、意味を伝えているところがある。お正月の花にしてもそうですよね。松竹梅がおめでたいことの象徴になっているし、あるいは千両万両などを使いますけども、お金持ちになりたいという願いがこめられています。あるいは橙だとかユズリハを使いますが、これは代々家が栄えるようにと、あるいは子供が親より先に行くようなことがないようにという意味がそのなかに含まれているわけですね。

ただ最近の傾向をみてみますと、そういうことはほとんど使わないで、ただ植物が飾られているというケースが多いようです。これには親の責任もあるでしょうね。もう少しそのもつ意味とかいうものを、子供にあるいは若い人に伝えていくということが必要なのではないかと思います。

同じ教育的な意味でも知的障害の方々なんかは、なかなか数や長さの概念量の概念というのがつかめない。だから実際栽培したものを通して、「どれくらい伸びましたよ」とか、「いくつ実がなりましたよ」とか、あるいは「これはこういう色ですよ」とか、そういったことを教える媒体として栽培しているという例もあるわけです。

これは鹿児島での市民農園の例なんですけど、この子供さんたちが春菜の花畑に飛び込んだところ、蝶がわーっと飛び立った、その飛び立った蝶を見て、子供たちはぎゃあぎゃあ泣き出した。このお母さんにしてみれば、きれいな花畑に蝶がいるというようなことは、自分達が子供のときはこのようなことは当たり前だと思っていたのに、この子供たちはそういう風なことは知らない。やっぱりこれは親としても、実際に体験させ教える必要があるんじゃないかというようなことで、この市民農園を借りて子供と一緒に菜種を、菜の花を作ろうということで始めたんだということをお話しておられました。

(身体的効用) 次は身体的な効用です。身体的な効用というのは大きく3つぐらいの側面から考えることができます。ひとつは食べ物としての役割ですね。食

べ物、嗜好品、あるいは薬といった意味です。これはもう昔からの栄養学やら食物学で行われているので省略します。

2番目は体を動かす、いわゆる運動機能、身体機能としての側面からのとらえ方です。実は園芸作業というのは体を動かさなければできない。実際体を動かした時にどれくらいの運動の強さになるのかというのを測定したことがあります。畑を耕すことか、あるいは木を切ることとかは、健康維持として推奨されているウォーキング、いわゆる早足で歩くことよりごく僅かしか運動量が大きくありません。園芸作業の大部分はそれよりもほんとは小さいものが多いですね。

運動量がうんと小さいものが多いとはどういうことかという、これは決して運動として意味をなさないかという訳じゃない。実は体力に合わせてそういう作業を選択できる、つまり体力の劣った人は劣った人なりに、自分にあった作業を選択できるということになります。また、弱い作業を継続的にやることによって有酸素呼吸をする。つまり、脂肪を減らす役割もあるかもしれない。それから、体を動かすということが代謝を促進するというような働きもある。運動としての機能をどの程度もっているかというような例を一つ挙げました。

これは畑を耕したところですよ。三本鍬使いまして、こちらの方では何というのか知りませんが、三つ又鍬を使いまして畑を耕したんです。これで畑を耕すことを一気にやります。休み休みやりますと一日でもできますけど、一気に続けてやりますと、若い人で、そうですね20分できればいい方でしょうか。50代位になりますと数分、60代になりますと3分位やればいい方でしょうかね。

一日にその作業を一回だけ、毎日積み重ねやっっていく、それを60日位続けてやりました。その途中で、背筋力を測定してみました60日間続けましたら35%位、32~3%高くなったわけですね。いわゆる筋肉が、背筋力が強化された。ここで耕すことをやめました。で、20日か25日毎日に測って見たんですね、そしたら40日か50日たたないない位で、ほとんどもとの状態に戻ってしまう。筋肉はそれだけ衰えるんですね。

こういう経験はですね、皆さん風邪を引かれた時のことを、風邪だけに限らないですが、病気をした時のことを思い出していただければいいと思います。病気を一週間寝込んだらですね、まともに立ち上がれる人はいないでしょうね。立ち上がっても歩けるかという歩けないですね。それだけ筋肉というのは使わなければ衰えるんですね。その衰えるのを防ぐ意味では、園芸作業というのはもってこいの作業です。

(人間的効用) こういった役割というのが、園芸作業の場合には大きい。健康を維持する上で関係しているという風に考えられます。このように色々な効用があるんですけども、全てこのような効用というのが、我々に様々な意味での喜びを与えるんですね。これが総合的に作用して、「よかった」とか「楽しかった」とか「おもしろかった」とか、そういう風な体験を味わせてくれるわけですね。

そのことが、例えば技術の上では、「より難しいものに挑戦しよう」という風な意欲、まず最初は「できた」という達成感、それによる自信、「自分にはこれぐらい

のことができるんだ」という自己評価が高まる。こういう風なことを味わせてくれる。そこから技術もレベルアップしていきます。個人的に非常に生長していくわけですね。

同時に一方では、自分が作ったものを人が食べてくれるとか、あるいは花を褒めてくれるとか、そういったことがありますと、そこで社会的なつながりができてきます。この社会的なつながりができてくることが、自分だけじゃなくて、他の人のことも考えながらやるという、いわゆる社会的な意味での成長にもつながっていく。そういう意味で、人間的な成長が期待されるということになるわけですね。そういうものを体験しますと、もっとたくさん、もっとおいしいものを、あるいはもっときれいなものを、あるいはもっと珍しいものを、そういうものを栽培してみようという意欲につながっていくわけですね。

これは、自分一人の場合にはあまりない。まあ自分一人でそれなりに楽しめるんですけども、他の人とのつながり、社会的な視点でとらえたときに、これが生きがいと言われるものですね。そういうものを積極的に推進していこうではないかということで、生きがい農園とか、あるいはふれあい農園といったものが、特に高齢者対策などで活用されているところですね。

このような園芸活動の楽しみと申しますか、おもしろさといったものを表した歌がありますので紹介しますと、「たのしみは朝おき出で昨日まで無かりし花の咲けるみるとき」これは江戸時代末期の歌人の橋曙たちばなあけみ覧という人の歌だそうですね。

(スライドを指して) この下は、鹿児島市の市民農園を作った方の感想にあったものなんですが、「素足で畑を耕し、種を播き、芽が出て、一日一日と大きくなり、青々とした野菜を自分で作ったという喜びでいっぱい」。この感じですね。植物とかかわる、このなかで非常に大きな喜びを味わっている様子をうかがうことができます。

このように、人間に対して、いわゆる精一杯生きている、あるいはこう充実した感じを抱かせる、こういった作用を、機能を、園芸活動は持っているわけです。

園芸療法から園芸福祉へ

この様々な園芸の機能を活用して、そして人間の幸福をさらに増進させようという考え方が実は園芸福祉という考え方ですね。園芸というのはいろんな効用を持っている、そういうものを積極的に活用していく、今の状態よりもより良い状態になるようにもっていこうと、そういうのが園芸福祉の考え方の根本であります。

もちろん全ての国民が対象になりますし、自分でやってもいいわけですし、あるいは誰かの助けを借りても構いません。とにかく専門家っていうのは必ずしも必要ではない。自分でやって結構なんです。

ところがそうは言ってもですね、その園芸の効用を自分ひとりでは楽しめない人もいます。あるいは自分ひとりでは享受できない人もいます。身体あるいは精神的な意味で、体が思うように動かないとか、あるいは精神的な働きがうまくいかないとか、そういった方は自分ではできないわけです。とするとその人には、やっぱり誰かが支援してやらなければいけない。

自分で園芸の効用を享受できない、いわゆる園芸福祉を推進できない人ができるように支援する手続き、これが園芸療法なんですね。もちろん、この支援をするにあたっては、誰がやってもいいというわけではないんです。なぜならば、支援を受ける人というのは、そのかかわる人によっていくらでも左右される可能性があるんですね。ですから、支援を受ける人に対してきちんと責任を持って、いい方向に行くようにしなきゃいけない。そういう専門家のかかわりが必要なんです。それが、昔から言われている言葉でいえば、園芸療法士という専門家なんですよ。

(園芸福祉) 園芸福祉というのは全ての人を対象としたものですが、そのなかで、「自分でできない、自分でその園芸福祉を享受できない人に対し、園芸福祉を享受するための専門家がかわりながら、その人達の園芸福祉を摂取するようにやる手続き」、これが園芸療法と言われます。その療法というところで、どういう点が、いわゆる単に園芸福祉あるいは活動と言われるものと違うかという点を見ていきますと、まず、「誰がやるのか、例えばその専門家は誰なのか」と、それから「どのような人を対象にして、その人のどこをどのようにより良くするというか、あるいは改善しようというのか、あるいはそのときに何を媒体として使うのか」、「それをどういう手順でやりながら、その結果をどう判断していくのか」。こういった条件を整えた時に、初めて療法と言えるわけです。

昔から園芸活動というのは精神病などではやられていました。だけでも、単に園芸活動をやらせただけという話で、このように手続きをきれいにやっている例というのはほとんどないようでした。媒体として何を使うかというときに、園芸を使うというのが園芸療法なんですね。ですからショッピングを媒体とすればショッピング療法ということもある。笑いを媒体とすれば笑い療法というものもある。皆ありますね。いろいろなのがあるわけです。

(園芸療法) そこで、園芸というものを媒体とする園芸療法について見てみますと、園芸と特に医療福祉、とにかく自分でできない人ですね、そういう人に関する知識をもち、それからそういうものをできないような方々がどういう性格なのか、どのようなことを必要としていたか、といったことが判断に必要な材料になるわけです。で、その人のどこをどうしたいのか、例えばその人が非常にふさぎこんでいる、ふさぎこんでいるのだったら、もう少し明るくなるようにしたいのではないかとか、人とコミュニケーションできないのでこれをできるようにするにはどうしたらいいとか、こういう意味で園芸を使ってやる。その時、やるにあたって、これらの作業をどうやるかということとちゃんと計画を立てて、そして記録して、さらにその効果があったのか、なかったのかを評価しながらつぎの段階に入っていく。これが園芸療法の基本なんですよ。

昔は、媒体として園芸（植物の栽培、手入れ、それに関連する諸活動およびその過程で、あるいは結果として得られた産物の鑑賞や加工、利用など）を用いるところまではよくやられていた。ところがその過程と成果を記録し評価する、この辺りがあまりやられていなかった。この辺が、園芸療法が日本に入ってきた時

に「これがやられてなかったんだなあ」という形で問題になったんです。

今の課程（プログラム）を、アメリカで行われているものから紹介していきます。

まず、必要性を査定する。「必要だ」と。「どういう風にしたらいいか、どこをどうするか」ということをまず判定しながら、実際に植物をどういう風に使うかということを考える。そしてそれを実際に遂行する。そしてその効果を判定する。当然その記録はとっていかなくちゃいけないわけですね。いわゆる医者に行ったらみんなカルテを作りますよね。記録をとるといって、あのカルテに匹敵するものなんですよ。

医者にかかった場合は、治ればみんな行きませんか、「ああよくなったんだろうなあ」と思うんですけども、こここのところをきちっとやっていく。それで効果があった場合には、またつぎに目標に向かっていけばいいわけですが、なかった場合にはどこが悪かったのか、これを一つ一つ点検する必要があります。それで、本当に必要性があったのかどうかというようなことになるわけです。

(園芸療法導入時の混乱) このような、主に医療的なあるいは付記的なかわりを要する人の治療、リハビリ、あるいは生活の質の向上などを狙いとして園芸療法というのが、アメリカで本格的に導入されたのは1991年以降なんですよ。

そして1994年位から、急速に園芸療法に対する関心が高まります。園芸療法に関する資料の増加の様子を見てみますと、1994年というのは国際園芸学会議というのがあった年なんです。それ以降、爆発的にいろんな資料が増えていきます。それと同時に、いろんな啓蒙のための講演会とか、セミナーなどもやはり増えていきます。そういうところで、やっぱり似たような言葉がいろいろ出てきます。園芸療法、園芸セラピー、ホーティカルセラピー、花療法、そういった言葉が出てくるんですね。これは（スライドを指し）どういう言葉がいつ位からどれ位使われるようになったか、主な新聞で調べたものです。

このようにいろんな言葉が出てくるということはどういうことかということ、それぞれにとらえ方が若干違っているということなんです。このように違ったものがいっぱい市場に出回りますと、新たに園芸療法を学ぼうという人にしてみれば、一体園芸療法とは何だろうかということになって混乱してしまいますね。その混乱はどういった場面に出てきたのだろうかといえますと、背景には、それを紹介した人達の専門がそれぞれに異なるということがあります。造園関係の人が紹介したこともあれば、園芸の人が紹介したのもある。あるいは福祉の人が紹介したのもある、あるいはそれとは全く関係ない人が紹介したのもある。それで、少しずつ考え方が違うんですよ。

どういう点で大きく違っていたかということ、まずは園芸のとらえ方の内容がひとつは違う。「植物の手入れをすること」という風にとらえる人もあれば、「植物そのものをとらえるべきだ、植物そのものを含めるべきだ」と言う人もある。それから、対象となる人がどういふ人なのか、「障害をもつ人」といふようなものから、「そういう考え方に限定したらおかしいじゃないか」と、もうちょっと広げて考えるという人もある。

園芸療法の狙いについても、「治療やリハビリだ」と言う人がおり、最初はそういうことだったんですけども、後の方になると、「QOL (Quality of Life)の向上、生活の質の向上、あるいはもっと、現状よりも少しでも何か状態が改善される、可能性を増進する」ことを目標にする。こういったように非常に変わってくる。

これを全部ひっくるめてしまいますと、園芸をやるとればみんな園芸療法みたいになってしまいます。これじゃ分からないですよ。特に、療法、療法士となりますと、これは専門家です。その人の専門というのはなにか、どこに専門性があるのかということきちっとしなきゃいけなくなります。それがわからなくなってしまう。

動物療法なんかでも話題になったんですけども、動物にかかわる活動なのか、あるいはそれを療法とする行為なのか、そこら辺の区別が分からなくなるわけですね。動物介在療法などは、専門家がかわかってきちっとするものだというひとつの考え方をアメリカから導入して定義しました。芸術情報学会でもやはり同じ様なことがなされました。だけど、園芸療法関係はまだそれははっきりしてないですね。

(園芸福祉のなかの園芸療法) それで療法自体に対する考え方というのを一般的に聞いてみますとですね、病院とか、病気とか治療とか、リハビリ、薬、癒し、等々ですね、やはり何らかの心身の状態に関わるものが圧倒的に多くなっています。特に、実際地方自治体などからいろいろ話を聞きますとね、やっぱり園芸療法ということになると、いま挙げた考え方、とらえ方をしている方が多いんです。

ところが、地方自治体では、いま、医療保険ですとかの問題があります。要するに特に、お年寄りが病気になる前にいかに健康的に過ごすか、生きがいをもって過ごすか、この点が問題なんですね。そうするとですね、こうした療法という概念のなかにはどうもはまりにくい。だから国や自治体の政策のなかでは取り上げにくいという問題が出てくるわけですね。これは実は1996〜7年くらいから出ておまして、地方自治体の方にはどうもピンとこないというような点もあるわけです。

これを経て、いわゆる健康な人達であっても、より良く生活の質の向上を図る必要があるし、健康を維持する必要もあるという考えを、もう少し入れていかなくてはいけないのではないかと。このために園芸を活用するという考え方はないか、で使われた言葉が、実は園芸福祉という言葉なんですね。これは園芸療法と目的が同じなんです。園芸を通して、人間の幸福といったものを計る、あるいは生活の質の向上、や自己実現を計る。こういったものを一般に園芸福祉といいます。

そのなかで、園芸福祉は全ての人を対象とするんですけども、とりわけ園芸療法の場合は、何らかの心身の不都合があるために自由に園芸を楽しめない人達のためのもなんだ。そういう人達のためには専門家がかわらなければ駄目なんだと。しかし、園芸福祉と一般的にいう場合には、必ずしも必要ない。自分でやっても結構だということになる訳ですね。

具体的な心身の健康回復、維持増進、余暇活動、生活能力の向上、精神的情緒的な成長、あるいは交流、これらはみんな園芸療法も園芸福祉にも共通している

んですね。だけど違う点はどこか。実は心身の治療やリハビリテーションは園芸療法という言葉にしないとちょっとかかわりにくい。ここに非常に特化したところがあるんですね。

逆に園芸療法ではどうも馴染みにくい点がある。地域作りとか、その地域の活性化、健全化といった社会問題との関わりとなりますと、どうも療法では馴染みにくいんですね。どちらかというとならば療法という言葉は個人的な性格が非常に強い、福祉となると社会問題も含んでくる、このような捉え方ができるのではないかと思います。

こうなると園芸福祉というのは、園芸の効用を活用して、より良い暮らし、人間らしい生活をするようになることで、そのなかで、自分で園芸をできない人達が、やっぱり園芸の効用を享受して、その園芸福祉を実施するために、専門家がかわかって支援する必要がある。その専門家がかわかって支援するというのが園芸療法である。ということで、園芸福祉のなかの園芸療法というのが理解していただけたんじゃないかと思えます。

園芸のもたらす効用を活用してより人間らしい生活をする、人間の幸福に貢献していく

じゃあその園芸福祉そのものが、園芸というのが、何で作業といったような効果というのをもたらしてくれるのか、そこら辺を少し基本的に考え直してみる必要があるんじゃないかと思われま。このことに関連した見方ですね、なぜ植物あるいは園芸というのが、我々の生活の質の向上に関わるのかというようなことを、レルフ博士がまとめたものがあります。

レルフの精神的健康

(肉体的健康と生理的健康) 1つ目に生存に関わること、2つ目に生活の質に関わること、この2つがあります。生存に関わることは食べ物ですね。これは肉体的健康に関わります。次に生活の質の面では、いろいろな景観をとらえたり物を見たりするというようなこと、そのような生理的健康にもなる、例えて言えばやすらぎといったものがあるんですね。それから世話とか栽培を通して心理的に安定感が得られるというか、私達は子供の世話をしたりするときなどに非常に大いなる喜びを持つものですが、同じものを植物を世話する時に味わえますよね。

(社会的健康) 最後の3つ目に、あるものを分かち合う、つまり作った花をみんなが喜んでくれるとか、あるいは野菜を家族が喜んで食べてくれるとか、あるいはもらってくれる人がいるとか、そういう分かち合いです。これは社会的な健康です。

この3つは一言では精神的健康ということになるし、3つが満たされて初めて人間としての健康が満たされるんだ。図れるんだという言い方をしています。

マズローの欲求段階説

もうひとつは、マズローの考え方で、欲求段階説ですね。これもそれなり当てはまる場所があります。

(生理的欲求) まず最初は生理的欲求です。五感で味わう、体を動かす、園芸活動というのはまさに生理的欲求を満たしています。

(安全欲求) それから花と緑の環境、これはやすらぎとか、なんかほっとするというようなものがありま

すよね。これは安全の欲求を満たしている。

(所属と愛の欲求) 次の段階は例えば花の美しさに共感する、緑の美しさに共感するとか、あるいは一緒に共同作業をする、そういうことで仲間を作り、共通体験を味わうというようなことはまさに所属と愛の欲求、こういうものを生み出してくれる。

(承認の欲求) このなかで自分で作ったものが褒められる、あるいは「よくできましたね。」ということになる。これは人に認められたということになるわけですね、承認の欲求を満たしている。

(自己実現の欲求) ここまで味わってきますと、より難しい植物の栽培に挑戦してみる、あるいは他人あるいは社会のためになるようなことをしているという自信からくる喜びがでてきますと、「よしもっとよくやってみよう」というようなことになってきます。これは自己実現の欲求ということになるだろうと。

動物と人間との違い〜創造的な行動〜

これで分かったような気になりますが、もう少し別の観点からとらえていく必要があるのではないかと思います。私達は人間という風に言いますが、実はヒトはホモ・サピエンスという動物ですね。動物としてどういう本能的な欲求を持っているのかと言いますと、まず自己保存の欲求ですね、まず自分が生きなきゃいけない。それからもうひとつは子孫を繁栄させなきゃいけない、自分の子孫を繁栄させたいという欲求ですね。いわゆる種族保存の本能、欲求です。

このためだけに生きているかというところじゃない。どこに動物としてのヒトとあるいは他の動物と人間との違いがあるかということになります。今まで、人間と他の動物とどう違うかということを通していろいろ人間規定というのがなされてきています。これを並べてみますとね、50〜60あります。そのなかでおそらく皆さんが聞いたことあるだろうというものを挙げてみますと、例えば「考える葦」なんていうパスカルの言葉がありました。アリストテレスは、「社会生活をする動物である」という言い方をしていますね。それから、建築家の黒川紀章という人は、動民、つまりホモ・モーベンスという言葉を使っています。デズモンド・モリスは、なんて言いますか、ふざけているのか何かよく分かりませんが、「裸の猿」だと言っています。よく聞かれた言葉かもしれませんが、ホイジンガは、遊戯的人間、ホモ・ルーデンスといっている。どれもですね、それなりに分かったような気になるんですが、やっぱりなんとなく分かんない。

人間と他の動物との違いをどのように捉えたらよいかということになる訳です。このように考えて、まあいろんな説が出てきたのですが、いわゆる「工作人」、「物を作る動物である」というような言葉もありました。「ホモ・エコノミクス、経済人」というのもありました。これは日本人の悪口に使われましたがね。

戦後、「なるほどこれなら分かるんじゃないか」ということで、クローズアップされてきたのが人間の脳皮質ですね。これが人間は非常に発達しているんだと。この脳皮質に我々の行動を司っている部分があるという考えですね。脳皮質が発達して何をしようになったかと、これはですね、考えることができるよう

に、物事を考えてするということが非常に発達してきた。脳生理学者の時実敏彦さん、あるいは市川亀久彌さんは、その脳皮質を使って創造的に行動できることに特徴があるとしたわけです。つまり人間の反応というのは、反射的反応と条件反射的反応とあるわけですが、その他に「考えて情報が入ったものを頭の中で判断して状況に合わせて行動に出す」という機能が備わっている。ここに非常に大きな特色があるというわけです。この考えを取り入れてみるとかなりよく分かるのではないかと思います。

「狩る」+「造る」=「獵る」、そして「育てる」

私達は本能的に、つまり生きるためにいろいろな物を手に入れます。同時に一方では、種族維持の本能のひとつとして子供を「そだてる」ということをします。これは本能的な基礎としての行動ですね。ところが脳皮質の働きによって創造的な行動に進化させた行動がある。これを「獵る」という言葉で表現します。ここから、種族維持本能に基づいた「そだてる」行動を、脳を使って客観的に、創造的に行った。つまり「そだてる」から「育てる」という行動に進化した。ヒトから人間に進化した段階で、このような行動を人間が獲得したという点に、ひとつの大きな特徴があると捉えることができると思います。

具体的にどういうことが我々の行動のなかにあるかと言いますと、大きく言ってハンティング（狩る）に当たるものと、そのハンティングして得たものを様々な形を変えて「造る」。ことと、大きく2つに分けられます。

食べる、飲む、見る、着る、味わう、情報を得る、芸術品を味わう、これらは「狩る」行動、ハンティングになる。物をつくる、文をつくる、考える、工夫する、芸術品を作る、庭や公園を作ることも入ります。こういったことは、いずれもこの「獵る」行動の範疇にあります。「育てる」は、子供を育てる、植物を栽培する、動物を飼育する、あるいは後継者を育てる、といったものがあるわけです。

意のままにならない「育てる」行動

実はこの行動類型というのが非常に特徴的なんですね。なにが特徴的なのかということを見たのがこれなんですが、行動の対象になるもの、これは育てる場合に生き物じゃないと駄目なんです。それから対象へのかかわり方は、「獵る」場合には、「獵る」人が、自分がどうしようかという考え方で対処できます。ところが「育てる」はですね、どうしようもないんですね。相手が成長するのを、極端に言えば待つしかないんですよ。

自然のリズムなどに合わせて植物は成長しています。その成長をコントロールすると言ってもホンのごくわずかしかできない。基本的にはコントロールできません。逆に我々の生活をそれに合わせるんですよ。春は種を播く、秋は収穫するというのは植物のリズムに我々の方が合わせているんです。この意味で、資源的あるいは有機的、客観的という言葉も使います。

対象と接触するだけなら、手っ取り早く自分が目的

に合わせて一時的にかかわれば済みます。例えば収穫するとか何とかしたら時間がかかるといっても、ある程度のプランを立てて、その道筋通りにやれば済むんです。だけど植物を育てる場合にはとにかく時間がかかる。長期間、継続的にかかわらなければ駄目ですよね。種を播いてから収穫するまで、早いものでは、ハツカダイコンで二十日ですが、その他のものはもっと長くかかります。米は半年かかります。そういう意味ではですね、もう極端に言えばあなたまかせでしょ。天候まかせいうのもあるんですけどね。要するに忍耐が必要なわけです。

特にこの人間なんていうのは大変ですよ。20年してもまだ大人にならない、一人前にならないのはいっぱいいるんです。30になってもまだそういうのは最近います。親は大変ですよ。だけどそれをじっと待っておかないといけない。最ももう少し早く自立させるような教育もあるかもしれませんがね。それで、そういう「^か狩る」場合には、仕事としてかかわる場合には、断片的あるいは分業的に行える。

例えば産業的な意味で行われる農耕においてはですね、コメ作りなどが考えられるわけですけども、苗を作る人、植える人、収穫する人、脱穀するプロセスと分業的に行われているわけです。だけど、自分の家でやるような時には、種を播いてあるいは苗を植えてから収穫まで大体自分でやりますよね。捉え方として非常に総合的あるいは一体的なんです。

本能と人間らしさの両立

こういった観点からみた場合ですね、現代の我々はどうか。要するに今、我々はそういう本能的な側面といわゆる人間らしい側面とを両方持っている訳なんですけど、日常生活のなかでこれらを全部発揮する時に両方持つとかなないかん。両方持って初めて人間らしい生き方ができるということが言えるんじゃないでしょうか。例えばこの両方が無くなるという状態は決して人間らしい生き方をしているという風には言えない。特に経済成長が著しかった昭和40年代から50年代は、とにかく朝から晩まで働いて、子供の顔を見るゆとりもないというような状態が続きました。果たしてこれは人間として生きているといえるのだろうか。そういう点に疑問を持つ人もおるわけです。特に最近は多くなってきましたよね。

それで、いわゆる田舎に行って農業をやろうといったことが増えてきているのも事実ですね。こう考えると、どうも現代の我々は偏頗^{へんぱ}になっている。片寄っています。本能的な側面と人間らしい側面のバランスがとれてない。どっちに片寄っているか、こっちが圧倒的に強い。こっちが軽視されている、あるいは無視されている。そういう状態じゃないでしょうかね。違いますか。皆さん自身の行動を考えてみてください。

ここにおられる方は、農学部あるいはいろんな教育の場におられる方が多いと思いますので、「育てる」ということに対して、あまり感じられておられないかも知れないのですけれども、とにかくどうもこちらの方が非常に陰の薄い存在になってるんじゃないかと。本能的な側面と人間らしい側面。この2つの行動というのは、まあ車でいえばですね、両輪に当たるわけです。

車の両輪がバランス取れていなければ車はまともに進めない。車がまともに進む、つまり人間らしく生きるという観点からすれば、やはりこの「育てる」ということがもう少し大きな意味を持ってくる、あるいは尊重されるようにならなければいけないんじゃないか。

そういう意味では、我々は人間疎外、つまり「育てる」ということをなくした状態に置かれているという面もあるし、場合によっては自分から育てるということを放棄しているという場合もあるかもしれません。特に最近、児童虐待ですとかね、あるいは捨て子だとかいう風な問題が話題になっています。すごく増えてきていますけども、それはやはり「育てる」というものの考え方が、あるいは「育てる」行動が少なくなってきたんじゃないかと考えます。なぜかという、結局自分中心の考え方ばかりなんです。育てる場合には自分中心の考え方は駄目なんです。自分があれば当然相手がある。相手を尊重しなきゃいけない。育てる経験がなければ、恐らくこういう相手を考えるということは訓練されない可能性がある。この意味で、現代の社会というのはどうもやっぱり「育てる」行動、あるいはそういうものの考え方が足りない時代ではないかと、そういう意味では人間らしく生きているとはいえないということになると考えられます。

1990年位から、第2次園芸ブームといわれる、いわゆるガーデニングブームというのがおこりました。第1次園芸ブームというのは、1970年代の後半から80年代にかけてですね、これは公害問題がおこった時です。まちの中に自然がなくなったということで大慌てした時代ですね。まちのなかに植物を植えて、緑、植物という面ではまあ満足された。その第1次園芸ブームですね、園芸人口がぐんと増えました。

その後70年代から20年位、今でもあまり衰えないまま来ました。そして1990年代のガーデニングブームになってまた上がっています。恐らく第1時^か園芸ブームのときには、いわゆる花を見るといった「^か狩る」べき自然が無くなってきた。それで大慌てしてそういうものを準備したということですね。だけどそういうものを味わって以降は減らない。そして次に出てきたガーデニングブームという波がある。

育てることと共に生きること

やはりどうも我々は共に生きていないんじゃないかと、あるいは逆に言うと、本能的な側面と人間らしい側面がアンバランスな状態になっている。そうなると人々にいろいろな意味でのストレスを生んでくる訳ですね。あるいは不安やらを生じさせます。これが行き過ぎると、たまってくると病気になるわけですよ。だからなんとかこの「育てる」という行動を挽回して安定状態を取り戻したい。この潜在的な意識がガーデニングブームという形で表れたんじゃないかという風に私は解釈しております。

ということは、園芸というのは確かに「育てる」という側面を持っている訳なんですけども、具体的にどういう形で表現されているかということを見てみます。人間というのは、先ほど言ったように、創造的に生きる生き物なんですけども、同時に社会的に生きるという側面を持っている。これも欠かせませんね。そこで、

個人的な側面と社会的な側面とで分けてみたい、考えてみたいと思います。

「^か狩る」行動のなかでハンティングに属するものは、収穫、鑑賞、それからいろんな園芸に関する知識が増えるとかというような問題があります。それから、「造る」という行動では、園芸をやっていくうえでの問題を解決する、あるいは庭の使い方とか植物の植え方を考える、例えば連作障害とかありますよね。そうしますと、3、4年先のことまで考えなければなりませんね。それから自分で育てた生産物を用いて料理をしたり、いろんな工芸をしたりするという風なことは「造る」という範疇に属します。それから「育てる」、これは直接的ですよ。植物を栽培する、つまり直接的な行動です。

社会的な意味ではどういふものがあるかという、自分のほしい植物を譲ってもらったり交換などして、自分の手に入ると。これはもうひとり人がいるからできるわけですね。相手の人とできばえを評価し合う。あるいは知り合いが増えていく。これが手に入れる方法。

それが今度は、生産物を供給する。みんなが楽しむ快適な環境をつくる。家族や仲間とともに庭にかける夢を語り、その実現に勤め、その成果を味わう。いろんな造る行為に属するものというのは、このようなことです。

社会的な面での育てる行動にはどういふものがあるかという、植物の栽培を通して子供や同行者と共通の体験や話題ができていく。それを通して暮らしの知恵や文化を伝える。これは、今までそういったものを知らなかった人に色々教えるなどの形で、後継者を育てることにつながっていくわけですね。

育てる〜生き物と個人のつながり〜

で、ここです、園芸でなければならぬもの、他の活動ではできないものは何か。まず生き物という条件がありましたよね。動物については共通していることですが、こちらはもうほとんどの全ての狩る行動が主体になります。この育てる行動なんですけども、実はこの社会的側面はですね、どんな活動でもできるんです。テニスを通じて、指導して後継者を養成する。あるいは囲碁でもいいです。あるいは粘土細工でも何でも構いません。

ところがですね、この個人的側面。実際に直接に生き物にかかわりながら育てるということを学ぶ、体験する。これは植物を栽培する場合か、あるいは動物を飼育する場合か、あるいは子どもを育てる場合しかないんです。その実それ自体が非常に身近な活動なんです。先ほど言ったように、我々の日常活動のなかで、育てるということを体験し学べる場所はどこか。結局植物を栽培すること、動物を飼育することしかないんです。このことを実際今の子どもたち、あるいは40以下位の若い人たちはどの程度やってきているのでしょうか。

今の子どもたち、あるいは40以下位の若い人たちのほとんどが経済成長の盛んな時に育ってきた人達。農業に対して何ていうか、蔑視というか、農業を軽視するような見方が強かった時代ですね。私も田舎育ちで

すけども、私が学生、あるいはもうちょっと大きくなってから聞いたのはですね、子どもが畑仕事の手伝いをしようとする、「手伝いはせんでいいから勉強せえ」という風に言われたというんですね。その世代が今50代ぐらいになっている人達です。そういう親に育てられた子供たちは、既に20前後位になっている。

ということは、ほとんど生き物にかかわる機会がなかったということですね。この世代が圧倒的に多くなってきます。そういう人達が、果たして生き物を育てるという行動をどれだけしてきたか、あるいはそういう思想をどれだけ要請してきたか、疑問に思わざるを得ない。恐らくそのことがですね、今問題になっている17歳の社会問題ですとか、あるいは性の問題ですとか、あるいは児童虐待ですとか、あるいはドメスティックバイオレンスにつながる可能性が非常に高い。これからは生き物とのかかわりの面から家庭での環境を追及していく必要があるんじゃないかと思っています。

結局その基本に流れるのは、全部自分の都合で判断しているということなんですよ。自分の思うようにならないから暴力になる。自分の思うようにならないから児童虐待する。自分の思うようにならないから友達を殺す。こんなことが起こってきます。思うようになるならないの点で、やはりもう少し「育てる」という行動について見直す必要があるんじゃないかということになります。

行動から精神へ、身体から計画へ

園芸をやる過程で人間的に成長すると言いましたが、このことをもう少し別な面から考えてみますと、まず個人的には、育てる行動、^か狩る行動で満足します。あくまでも個人的な活動としてやっているんですが、その生産物ができると「自分でできた」ということになるんです。これぐらいのことができるという自信ができます。するとより良く、より美しく、より多く作ろうということになる。ここにひとつの個人的な成長があります。もちろん我を忘れて熱中できるような面もありますよね。

この個人的な行動にも外から評価が加わります。「ああきれいにできたね」、なんていうのは見ている人が言いますよね。そうすると、「自分は孤独じゃないんだ」と、あるいは「自分の作ったものを人が見てくれてるんだなあ」と。「役に立ったんだなあ」、「自分の存在も無意味じゃない」ということで、より良く、より美しく、より多く作ろうということになる。ここに働く意欲、あるいは新しいものへの挑戦が出てくる。これはひとつの生きがいになってくる。共同作業としてやる場合も共同的な活動している場合も同じですね。一緒に行動してやる。そしてそれが外部から評価され、また他の地域の人から評価されるかも知れません。

そうすると、仲間ができたり、あるいは連帯感とか共通の価値観ができたりするわけです。当然「役に立った」、あるいは「子供でない」というようなことを感じます。それは同時に自分の存在も無意味じゃないと自覚できることになるんです。そういうものが生きがいにつながっていくんです。

体を動かすことでまず、体力を取り戻すことができるし、精神的にもこういう風によりよく生きようと、

あるいはみんなのためになるようにやっいてこうというような形になっていきます。そうしますとね、黙っていても体の状態はよくなりますよ。だって、楽しく生活リズムをもって体を動かしながらやっておればですね、病は気からと言われますけども、体の方が良くなっていかないほうが不思議ですよ。そういう意味で、園芸というのは非常に重要な、しかも身近にできる。極端に言えばほとんど金のかからない活動なんです。

ですから、この活動をもっと身近にできるようにするにはどうすればいいのか。これはやはり造園を含め、都市計画の分野、あるいはもっと広く国土利用の分野、そういう人達が考えなければならない問題ではないかと思えます。そのときのキーワードは何か、「育てる」ということですね。園芸の特徴である「育てる」ということ、これをひとつ頭において活動を進めていただければいいんじゃないかと私は祈念しております。ありがとうございました。何かご質問などございましたら何なりとどうぞ。

(2002年9月6日北海道大学クラーク会館講堂において)